特43
108

091890-001-0

特43-108

日本神

山崎　杲平／刊

上

M22

DBO-0424

特43 108

序

心焉になれときゝ、見て見へぬを聞てきゝえぬを、食へども其味ひをしらぬ、南の漢れ親父殿の、金言をしたる其言は、物替り星移り、幾千秋の今日までも、人の牙齒ゝ固結て、かけも崩も南山の、岳と等しく膾炙りて、其ほとぼりの覺ないれも、蓋道理と事實とに適ひ、持ゝ〜たるゝ相違なし、然して見きゝ編者も、是が裏面のら論さんゝ、心焉ゝ在るとれも、見ざるも見へ聞かざるも聞へ、寢て夢間に彷徨と、去れば此に編輯せし、日本神れ物語を續のせんと、平常福神信仰を、心にゝめて余念なく、亦小生ゝ、放蕩無賴仕盡して、貧困いよ〜、切迫きて、居ても起ても、居られなく、他人に

NDL 232/9/22

大福帳

救助を頼んと、一人皆嫌てよせつけず、兎やせん角と種々に心を碎く其餘り、所謂日本神ゲ、おハろ焉ゐ在りしより、をごろむ閑の夢の間を、書綴りしものにして、畢竟看客の御欠伸を、慰撫申さんと、拙き編者の命毛に、最とながゞしくも識せしゐなむ、

編者まうす

日本神目錄

第一回　貧者遁レ急縋ニ富者一　貧富雙神授ニ奇術一

第二回　福軍諸將議ニ軍事一　錚臣對策決ニ軍議一

第三回　貧富兩軍開ニ戰端一　貧勢數回破ニ福軍一

第四回　福軍猛將擢ニ貧軍一　兩軍逡巡謀ニ再擧一

第九回　下宿主人責ニ懶怠一　三生不レ覺起ニ奇過一

第十回　志士輕進不レ顧レ後　天保志士誡ニ壯士一

第十一回　懶怠驕奢久不レ續　二生相會求ニ電線一

第十二回　放蕩結果招ニ零落一　遂受ニ同鄕人士惠一

第五回　欲レ酬二舊怨一贊二貧軍一　敎二唆和姦一逞二謀計一
第六回　婢女溺レ情陷二奸策一　深窓處女完二春情一
第七回　婢女協力助二亡命一　雙親溺レ愛被レ貪レ財
第八回　欲レ復二私怨一企二暴舉一　處女悔レ非飯二生家一
第十三回　民權主張唯招レ貧　紳士附着受二富貴一
第十四回　辨士乘二衆人一喝采　無益抵抗陷二苦痛一
第十五回　嗟呼後悔先不レ立　獨座二室中一歎二居殘一

終

滑稽新聞 日本神

第壹回

貧者遁急組二富者一　貧富双神授二奇術一

夫れ貧富ハ勵と怠とよ因つて成るものよして敢て天命時運などゝ因縁もなき痴言を羅列するの要なきなり然れハ富を希ふものハ只管勞働するの外なく貧を望むものハ徒よ遊惰飲逃以て其歸着を待つへきなり然ハ去なから働て以て掎頓の財を重ぬるも貪欲よ陟る時ハ寧ろ赤貧止足の清廉よ若かさるへし是を以て乎仁者ハ富を好まず富めハ必ず仁を傷くと老賢なる言を併へても其樣な頑固のお談議ハおへうの褌を切てから五尺の身躰よ成まてハ度々聞て耳朶よ多固の出る程聞馴て五日の晩の十日の朝百も承知二百も合點然れど人年頃よ成る時ハ夫れ相當の交際も爲さねハあらぬ世の習ひ其交際ハ是非ともよ酒と色とが大妙藥此妙藥を用ゆれハ自然と楽こむ粋人風俤是からが娼妓でも亦藝者でも堪らない徐々腰がたるくお り何の漢のと持こまれ言よ言れぬ流盼すりや万更袖手も置れもせず其所が思案の外とやら

先二度い慇ぜねと折角奴等か懸想せし心ざしをい水泡とする不人情の極点おれハ有爲男子の執らぬ所殊よい社會遊通の道を塞と謂ふものの抔と自分免許と勝手をば奴多よしたよお味噌理屈如何な老實を問ばこう倍々募る放蕩無頼行燈部屋の居殘りと附馬立い紋切形親戚故舊い言も更なりあるとあらゆる知人よ時借の道も盡きはて、其結局い紅樓の接丁と迄馴下り昨日の客い今日の僕替り易ひは世の習ひと一更平氣の平左さん更よ改む氣色おき人い世間よ間々あるべしされい這首よ富貴よ腰をおしてるや浪速街の福來屋常左衛門とて金銀財寶庫よ滿親屬家僕多くつかい家内和順よ暮せしかハ主人常左衛門い殊さらよ唯正直を道として仮よも貪る心なく積善かさねて余慶とおる世の諺もむおしからず悴長壽よ配偶を迎へ嫡長をもふけて喜悅の其振舞をなさんとて出入の庖厨よ云寄て献立書を操かへし悴夫婦ようれこれと庭口近く膝をすゝめ相談おして居るおりしも戸外の方よりおゆるしとひう〳〵聲よて音のふよぞ庭よ居たりし看屋い中戸を細目よ明かけて其人体をつく〳〵見れい年齢三十五六よて左のみ醜き男ならねど頭髪乱々と髭を延し秋風寒く吹時も單衣着物もしほたれて心の理よ締りなけれい帶よて腸見すかされ彼の庖厨は聲をかけ其醜体ざまをして庖々

此家へはいるとほ無方圖な乞丐めでて往と叱付れば此者い屋内を覗て厠を乖れイヤ否私い御主人よ助かむ願ふり升て面目無も醜体を顧みづしてわざ〳〵參じましたる者で貧姓屋困助でふり升ると言つゝ中戸の裡よ入を常左衛門は見るよりも眉よ皺よせ又かと思へど和かよ彼困助よ向ひつゝ困助どのかよふ來さしたいつも健壯てお目出鯛定めし用事も有ふけれど今日い生憎取込よて貞よい客もある事故氣の毒なから出直して又良間わお話をお聞も致ませふと言れて困助頭をかき其儘庭よ躊躇り箇樣よ度々參り升る譯てい更おムらねと御覽の通の困窮よて最早今日が渡れませぬ夫故耻をも弁へず尊下を便りよ參りましたる何卒今一度御慈をもて此難澁をお助けよ預りとふ存じ升る是迄數度御恩のある御取巻の其内を聊よても持參せば上りよくも候得どまだ上塗の御合力山より高き當家の數居一度越るい中々よ青よも腹よも替へがたき難口よ余りて參りますれい御忙しうも厶りましようよ何卒ぬ救助下されて聊か御恩よ與りますれい夫を首本よ何なりとも世渡いたして參り升れハ左れい生涯此恩決して忘れい致しませぬ付ぶん御掛辨下されて宜しふふ願申上升又出直して參りますよも今日辛抱か出來かね升唯幾重よもお願と跪居よ頭を摺付て然上よ時るを常左衛門

い間て片膝立直し困助どん何ぼ貧すりや純するとも又しても〳〵無心合力の其お頼み元私とお前さんとい親戚と言ふでいあしほんのさん所の附合よ御心易ふ致した中其上爺御れ貧兵衛殿が存命中から三四度取替金も有おれど死なれた事故其儘よ唯の一度も御催促いたした事も有ませんが夫から此人の代よなりても同屋の仕切が足ぬとか仕入物よ差支とか開度毎よ痛いしや定めて心痛せられよふと思ふて見れば是非おくも又も三兩又も五兩と節季〳〵々の取替が積りて都合三貫目跡でよく〳〵聞正せい皆々這人の不身持から悪ひ遊よ遊ひすて終よい家主よ追出され何處よござるか知らねとも或い三歩又一兩折々見へる度毎よ斷り申等なれと幼少よりして好と思ひ聊よても用達てお貸申せど其后い見る度毎よ風姿替り商賣とてもおき様子よ實い私も此程より假令一錢二錢でも困助どのへの取替い以來さつぱり止よふと心て思を捨ており升最早是迄取替分い厘拂も取ふと思ねば私か内も是かぎり御越い無用よして下されと謂れて困助何動かず一々御尤のお詞よて面目次第もムりませねど何處へ頼まん皆もなく是迄御願でましたも眞實よ必死の身の上なれい定めてお腹も立ませふが何卒御慈悲のお心よて今一度の御助けよ預りますれい此后い確と心を改めまして家業よ精を勵まして必す御恩を報しますると言終るを待兼てコレ〳〵困助どの其言譯い是迄よ何回聞たか知れ升ぬソリヤ聊の金子ゆへお借申すい厭いねと無心よ來られる度毎よ唯々〳〵言ふて貸しましていい却てお前の爲よいおらす先此度い如何おりとお前の思案で兎も角も亦商内でもさつしやれい其時よせぬと申しませぬ少し此方よ用事もあれバお茶なと呑んで早ふ帰おしやれチイ看屋チイ魚助大きよ待遠じやァ、いろ〳〵あお人か來て餘計お閑を取りましたチ、何やらの吸物じやアノ二献目の丼鉢い二杯酢がよか〳〵ふと常左衛門い振向て彼看屋よ語ゆつ、再び言葉をかわさねバ困助何も手をついてお腹の立のいで尤何分御願ヤます只今よていい后悔します何卒御助け下さいませハイ旦那さんほかんべん下さいませへイほ願ヤ升宜しくほ頼ヤますと登り夜船よ川堀の賃錢せがみて旅た客を搖ぶり起す如くして强ふ言ふを看屋い先より傍お聞居しよ余りの事と腹よ居かね主人の言ぼの切しを見て堪へかねてか困助を横目よ瞋んで立上りコウ此人いよい年して聞分のおい耻しらず這の旦那の御生質よ斯なて愛想つかされたいおまへの身持が悪いからなんぼおたのみ申たとて今日大事の御祝義日アがむさくろしいさまをして早天から義縁のわるいサア出てうせと引出すを困

助庭よ意路張ておたすけおねがいおたのみと尙おしつよくせがむよぞ看屋大きよ腹をたて
澁太餓鬼といゝさま腕をとつて中庭より力よ任せて引搦出し其儘大道へ連ゆきて門の潛り
戸ぴつしやりとしめ出されたる困助ゝ何とせんかた泣面よ腹ゝ立ども仕樣もくな當よして
きた金さへも思ゝく遊ふ片ちんば夫さへ尻の切れ艸履長刀ありの容子して只亡想々々と投
首よ戻つてみたる吾僑寓ゝほんの屋根あるべかりよて籠あれども鍋釜おく家中敷しも背く
ろめ四枚よたら畳さへ綻のちぎれし一畳は主の出先迄見とゞけんとあとよ遺りて止まれ
どけいしき催促來るたびよ表よ數ケ所啄からの燒跡よ紙屑屋もあぐみ果直歩の外よ渡され
たり具余ゝ柱と古壁の煤ぼこりよくすぼりて喰殘したる土鍋の喇も鼠よ引ゆかれ食物さへ
もおかりせバ唯困助ゝ手を叉き十方よくれて茫然と思案ゝしても工風ゝあらず愁面さげて
今ゝしも空しくおりし腹の中四方八方塞の友達よさへ見放され誰も金神うら鬼門當歳ゝ凶
ひ訃都星われと我身よ倦果てつく〳〵思ひ廻せゝ此界ゝおろか黄泉の地獄の沙汰も金次第
唯このものよ憎まれてゝ浮世よ生る甲斐もおく是までおせし放蕩が酬ゐて斯は窮するかと
さしつまりたる困難よ身の惡行を後悔なし彼常左衛門の身上よ亦比較てみる時ゝ同じ浮世

よ產れても宮殿の柱と雪隱の踏板如何よ禍福ゝ天まかせと言へと聞へぬ福の神うちでの槌
の七寶を時ちらすなら依古おしよ吾よも授たまわらで高ひ處へ槌もちと在て益おき稲神よ
り貧乏神の物好の招きよ逢て今更よ遲く心を改ても今日の救助ゝよも有まじモフ此上ゝ是
非がおい死てゝ命か滅なれゝ假令古ども纏ふとも七度轉で八回發る世よ有おらいと聞から
ゝ佛も祖師も一回ゝ難行苦行したまひて末世の衆生をたすけ給ふ夫ゝ世のため人の爲吾ゝ
食ため腹のため格別替りし譯てゝなし乞食をするも因縁と勝手理屈よ引寄る破れ手拭と土
鍋をさげてしほ〳〵立上り今宵吾家の見納と厠の中まて打詠め嗚呼哀れおる哉此身の果淺
間しや耻しやと無念の涙よ泣き寢入りよ寐入しよ枕邊近くよ壁あつて今宵汝が身を護る貧
乏神の出現あり心を慎めて此姿篤く眼を止て見るへしと聞より困助仰天なし振向くまゝよ
此神の形を看れゝ這ゝ如何よ色澁々墨さ痩面にて頭よ茶色の髪を乱し髭芒々と胸よ續かせ
物身ゝ荒布の如き襤褸を纏ひ何が袖やら社やら譯らぬ衣よ身と包み右手よ破れ團扇をもち
左手よ古びし箒木を携へ片脚ゝ草履片足ゝ鼻緒の切れし下駄を引ずり四方よ臭き香をちら
しすつくと立たる其形容いかなる貧相な夫でも空髮たつる形狀よ困助心をとりおをし貧乏

神より打向ひ何者なりとおもひしより三世相の書本でよりみたともあき貧乏神あた穢らわしい
此年月其破扇より招かれて斯まで此身はあり下り世上の人より指さゝれ今日と云今日一性懸命
此期より及んで何事か已等より聞べき言やある疾く立去れと言なから又心中より思ふよふ假令貧
乏神よても神と云ふ名の付ものか係る貧窮なる時より言葉交すわよしや又彼よも神通なき事
あらじ毒も藥の喩あれわ兎まれ角まれ言事を聞たる上の考と心決して恐れなく貧乏神より近
づけゞ此を看るより貧神わ輪のはじけたる醤油樽より屎うち掛莞然として打笑ひ便面を膝より
突立て如何より困助今言事をよつく聞けこのときとなりあがやより吹ならいの尺八のおとぶう
るまのおとびいくときこゆ夫れ夜る笛ふく時わびんぼふ神がくると云ふい此時より云いしめしなと
の行を心より止め不慮此家より影を忍ひ明暮所爲を看る所より破れ障子わ張替へす行燈の皿より吸
壺の山をおしてわ又晩早掃除したることもあく煤わ天井より雲を畫き一度の月代三月桃風呂
わ十日も浴されわ惣身苔むす垢を含み姑嫁の身持も普通ならす鹵鉄わ此屋へ入嫁の節より染
たる其儘より田辛螺のごとき齒をあらはし常透髮より立通し下靴の洗濯一度もせす其んあ不
開性の悴より生た汝あれわ係る貧乏わ當然うれより此家を出て行とわあんまりとわ消欲なりモ

シ困助さん聞へませぬと狂貧神かわめき立れわ困助言更て良かれ悪かれ神あれわ通力自
在わ得給ふへし非人とあさで此儘より腹を胞らす事ありや但しわ福でも授けたもふや福神な
らねわ左もなるまし何等の術よてこの究をすくひ給ふと問返せわ貧乏神わ點頭て問るゝ所
尤なり吾久敷くも此家を寓とあせし恩義もあり且亦貧兵衛のみならす今困助迄このとふり
貧の測邊より沈むと言ふ彼是其より吾爲より打捨置べき者ならねわ深く祕しとる貧術を今より汝
より授くへしまつた其術を何うと問へわ不食貧樂と云ふ奇術よしていつまで食を喰ずといへ
と腹中むおしくあるを堪へす翌日のたくわへなしと雖とも今日苦勞する事おく當坐暮しよ
安然と浮世を渡る其上より人より勸ることもなく謟ふことも非ざれば禮義氣兼をしらずして殿
冬の最寒き夜も布子なくても之を防き待ことなくて樂しみある自由自在の貧術あり則ち傳
授わ外おらず此破團扇をわたすべし是を以て一回まねけば其身わ輕く飛あるき節季晦日より
かけ乞わ留主遣ふべき世話いらず虛空を回り地を走る奇々妙々の貧術おれば夢々うたゞふ
事おかれと破團扇をさしいだせゞ困助うれしくいさみ立追從面より之を請取りおし戴て感ば
いなしコハありがたき神救より恁る奇術を授けたまふかアラ難有々々と頭より貧恩謝しけれゞ

貧乏神い笑を含み其破扇を授しからい又改て聞する事あり兼て汝も知りつらん近來福富の奴等を看るゑ利を貪りて人を痛めたまさか黄金を借んといへい命ゑ代る大切の印章斗りで倦たらず家財諸道具質ゑ取其上利足を高くして是をせたげて榮花を謀り造作普請ゑ立派を盡し衣類調度ゑ美麗を飾り翫水遊山ゑ樂むこと誰がお影で爲すべきや皆是世界の貧乏が持寄り錢も同じこと敷るといへど誰るなく益々繁昌爲まゝゑ分限者と云大家と号持磨呂長者と言うやされ已れと遨設氣色ゑて貧乏人を見るときい虫螻よりも劣りしごとく半錢借らぬ者ゑさへ骨腐りたる言葉といたし人を見下す舌長ゑ我い久しく齒がみをなし已れ富貴ゑ仇せんとさま〳〵不吉をめぐらせど彼等を護る福神多く貧乏係い我一人如何ゑするとも敵對かたし無念の拳を握りつめ時機のくるのを待うちも世ゑ頼母しき貧乏人日頃の願望成就せり汝困助今より我配下となり福の神征伐の加勢すべしと其命の下破闘扇を打揮りしゑ何國ともなく飛去りけり爰ゑ困助が隣ゑ長者の常左衛門と云ふ彼の分限者か同き其夜の事ゑして福神衛門か枕邊ゑ立ち宣ふよふい汝し性德正直ゑして家業出精し積年予を信する事感ずるゑ尚あまりあり去るゑ依つて吾今汝か爲ゑ十福の賞を作る謎で之を聽聞すべしと左おがら童子の戯るごとく最愛々しき淫聲ゑて授け給ひける其文ゑ曰く

一ゑ寶を振舞て二ゑ賑ひ悦んで三ゑ算用充分ゑ四ッ邪欲ないようゑ五ッ一統幸ゑ六ッ無心ゑ來ぬようゑ七ッ情を施して八ッ病のこぬようゑ九ッ子寶守り育て十ヲで德を弘めた

と

最と拍子足踏て調子をとり槌振かざして踊りたまふを常左衛門い是をて心のうちゑ阿房らしく亦笑しくも思へとも笑ひを忍で聞終り怕怖も頭を揚げ唯有難し尊しと感拜をして居たる内に彼の福神い座し玉ひ謹然として宣ふい予今此處ゑ形ちを現し尚告おくべき一條ゑり斗り亦外の事ゑもあらず先年頃より福者を疾む貧乏神身の非をしらす福を怨み不吉を起したて仇をあさんと寄々企圖ありといへとも貧乏神い彼れ一人福德神い圓滿ゑ吾等か組ゑい七福神稲荷妙見歡喜てん其余於多福福助迄みなこれ福の神崇め尚限りおき福神の金銀多寶の光りゑて仇なすこともあかりしゑ近頃世上の貧乏の枕邊ゑ立ち遊意を進め頻りゑ謀叛を告回るゑ何辨へなき貧乏とも兼々福者と爭へど黄金て面をはられたる其意恨ゑ心を合せ世の貧性を語らいて福者を倒して金銀を萩散しての企ゑて既ゑ此事懇れおし係る譯ゆへ近

くゝは貧福の大乱發るゝ必定なり然りといへども痩腕の貧乏共の爲す業なれゝ左のみ怯るゝことあらねど現時世上を見渡すは貧者ゝ多く福者少く歴々家業を爲といへども克く内實を捜る時ゝ天晴貧乏の味方なるもの十は八九ゝ有なれゝ定て大軍催すべし左すれゝ貧とて設られす吾も福力を合し福者の守護をあすへきなり斯る大乱發るといふも強て貧者の惡のみならす近頃福者の其内よも利慾に迷ひことを謀り人の痛みをかいりみす強慾非道の行ひ爲すもの世上は多くあるゆへは天帝皆らく之を戒めかゝる時節となしたもふ左すれゝ我等が神力をて乱を止むる事あらす何分勝敗分ざれとも又大平にいたる時あり然るは汝正路よして善行つくせし功は依り其貧福の合戦を今よりくゝしく見せおくべし后世人を教訓なす端ともおれゝ必も貧福衆議評定より軍の急引心は止め世の人情は較ふべし拙き笑談戯編といへと用て之を見る時ゝ其効必す少なからすと大黒神ゝみのと笠とをしいだし又宣ふよふ此包の内なるゝ歳月足下は踏まへたる俵の米を蒸たる物よて一日一粒食する時ゝ喰は飢ると言ふことなし以上三種の神靈を今より汝は授くへし貧福兩軍數日を經て動乱納る時いたらゝ再度乃出現おすべきなり夢々疑ふことなかれと示し給ふと其儘は飄然として立玉ひ大黒甘の上はある神棚へこう入給ふ常左工門ゝ良しばし感拜おして身を平伏しいと有がたき神敕は枕邊みれゝ告は遵わず笠と簑との傍は米の包の現然たれゝいよ〳〵信心肝は銘し不思其身を起しつゝ彼簑笠を着ると見て包を懐中おすと思へゝ不思義や座中の傍より異香薫して瑞雲たおびき常左工門抱がごとく飄々然と浮上り其まゝ虚空を走しること蘇武が胸でも中々は及ゝぬ事と感じつゝ幾億里數かしらねども不慮止まる所ありて常左工門ゝ空中より下界遥は見渡せゝ城廓巍然といらかをならへ關門玉殿人目を奪ふ金銀珠玉ちりばめて美麗莊觀いゝんかたなく帝釋天はありときく月宮殿も斯くやらんと只あきれたるばかりなり尚も隈おく見る所は錦の吹貫綾の旗黄金はまゝゆき馬印其外挿物倚羅を飾り天守樓ゝ紅の定紋染たる幕を連ね嵐はふかれ翻ぱんと靡きおびかす有樣はおもゝず左右の手をうちて是こう嚮は告ありし彼福方の本城おるべしいで眠を止て其次第見物せんと安座くみ其所此所ゐ眠を配りかたづをのんでひかへたり

第二回

福軍諸將議二軍事一
鎧臣對策決二軍議一

却説人能始終仁代繁榮天皇の御宇長壽萬年潤德月有福國の大將富福無苦の一統平よ金持卿
觀樂城の寶殿よ諸臣を集めて仰けるゝ如何よ穷々此度諸國の貧性ども富貴の榮花を羨ゑて
情慾ふかき迷霧よ浸され家業を怠り剩さへ僞りかまへて金をかりこみ福者を倒す數をしら
ず然といへども吾國ゝ慈悲善行をかたく守り損歩を厭ゝす貧を憐み或ゝ年賦よ割濟させ又
ゝ利足の用數をなし成丈勘辨なすといへど人の懷中當よして身分不相應の奢をおし自業自
得の貧弱をおのれよ改む心なく時節を識り人を羨み痩面はりて旗を靡し吾有福よ敵對こと
悪き貧者の振舞おらずや因て吾今味方よ所持せし貸証文の大金を一時よ取立攻立れゝ彼れ
貧的等は忽ちよ城を渡して遁出さん尙亦然るべき手段もあれゝ包ます逐次よ評議すべしと
大雄として御意あれゞ福富の老臣廣井氣之守劉吉進み出で申けるゝ君の御賢慮さる事おれ
ど其思案をめくらすよ近頃貧者世上よ漫り一統こゝろを合對おし其うへ貧乏の癖として日
夜金錢融通の工面よ鍛錬なすといゝ平常よ人を僞りて互よ自負の心ある奸智よ長し貧性が
今福富を滅亡させ世を貧道よ困窮させんと大望企て旗を上るゝおかゝ易き事よあらす俗
諺よ言る通り福ゝ愚か貧ゝさがまくと如何おる奇計をおさんもしれず左すれゝ迂闊よ立對

いて無易の黄金を散さんより唯貧がたの寄るを待て斷りいふて追かへさゝ喰だめもなき貧
人なれゝ貧よ迫りて其内よ必す油斷も有るおらん其時こゝ幸よ一種特別の見込を立一時
よ攻落すの策略ゝ諸福の方々如何あらんと辨舌鋭く述べ立れば哉井大瀬の頭廣家席をよじ
りて申けるゝ劉吉殿の仰至極もつともよゝいへとも畢竟貧乏の計略ゝ其日遁れの才智よし
て尻へ吾手の回ることおし疾く此方よりおしよせて只一戰よ打破り腮を釣上泡をふかし貧
乏の根たやしおすへきなりと宛も勇よく述けれゝ一言のもとよ一同が悪ゝ同意せりゝの人
々ゝ田柄山積守歳增、借家修理太夫員家、明地買之守家建、同嫡子建藏家倉、田畑貢年成、おど
みお異口同音よ申けるゝ廣家どの、仰の如く高の知れたる店借とも金の威勢を張回し面ゝ
り回して立向へゝ何條おうるゝことあらんやと福つんとして申しける係る所よ遠侍い遁下
りて申けるゝこの度君の御諚よより諸國の福將大小名只今當着致されれゝ御前よ出仕と
言上なす聲諸共よ堂々と烏帽子大もんいかめしく廊下よつゝく諸大名先其姓名を列記せば

果報寐松の城主　氣野長登守　春豐
樽船菱垣の城主　海邊大船の太夫　積員

同國荷積の城主　無事着左衛門狀　吉成
代物澤山の城主　番替仕送の太夫　元方
始州先金の城主　元安買之守　高資
田野石橋の城主　堅鍛治鉄石入道　心昌齋
相續附替の城主　日賦登之丞　元盛
貸崎取立の城主　古貸伊氣の守　元度
質素儉約の城主　身臺大治郎　季吉

有何れも劣らぬ綺羅をつくし威儀輝々と烈を正し持金卿の御前間近く一統拜謁なしおいり各々ひとしく座よつけい御大將い是をみて恬然として申げるい何れも到着滿足せり定めて風聽知りつらん此度世上の貧性ども不慮よ臨樓の旗をなびかし吾有福を困究させ貧を心の儘よせんと纏よ諸國よ發起なし無法の軍を起さんと依之今予等黄金の威光を頭よ戴き放逸無暫の痩貧乏を唯一戰よ追放おし難澁町へ退んと群議評定あす所未た衆評まち〳〵よて更よ一決するとおし諸富何れも白さまよ評議致され然るへしと御意の下より氣野長登守安春

豊御掟のおもむき畏まりたてまつる去おから這回の貧逆中々以て一應のことよ非す某愚案を回らすよ一文おしの彼等よ向ひ今福有の軍を起し假令勝利い得るとても味方よ損亡なきむ得す貧わ則ち空穴なり味方い知られし福積なり福つんを以て空穴よ向ふい理よ勝を制するも非よ敗を取るい道理の見易き所よして甚だ得策よあらざるへし依て口入仕間守金爲を呼出し此儀篤とは勘議あらい恐くい又良法を對策せんと評議定まりたれい次の間より金爲どの唯今君の御諚よより急き出仕をいたさるべしと聽と齊しく金爲ハット答て長廊下鼎三甘小袖よ長上下威儀を正して優々と並居る列坐を遙よなし平伏おせし其人品いまた四十路を越へずして面色白く鼻高く上品ありて賤しからず天晴大家の口入そと一統心よ感じける御大將い是を看て微笑玉ひて仰げるい仕間の守金爲とあらん今身昌齋が言よて始て秀才なるを知る然るよ今般貧性の逆意を討べき衆評なせと區々よして未た決せす足下い万事拔目おく條を計ると承知る今より福者の大軍師重く足下を用ふべし旁々存意あるべきやいかよくくと見廻し玉へば何も一同言をうろへ如何て異議の候べき疾々大軍師の下知よしたかひ一統軍令まもるべし唯評定を決し玉へと列坐等しく稟せしかば老臣廣井配里居城を守る

を專一と慾の限を知るべきなりされいと云て此儲よ眼の當なる貧究の借手を引請安閑と味方よ黄金を遊し擅んや然りといへども近來い借人い強く貸人い弱く能く其の先を聞たゞし老實でなけれい等閑よ數万の大金出しがたし某かねて閑者をいれ貧困場末の裏店まで廬賃のほどをさくらせしよ彼貧城の内よ居て裁賣居酒屋一文餅菓物草履草鞋を賣亦い水汲町小使いやしき渡世をなすといへど霊夜動き仕末をかし無慮よ黄金をしこためて内々福者よ預くる者稀よあるを聞及び疾より彼等を引入て貧者の暮しを内通させ其業体を考へみるよ貧困嵩家の風儀として武家い女色よ仕官を怠り商家い家業をうち忘れ青楼遊里よ意通せ音曲糸竹の道よこり或い雅風よ深くなづミ父母授る黒髪を何の益なく剃捨て下手宗匠と指さゝれ亦い大事の仕似世を賣戯作よ筆を執る者なぞ馬鹿い限りを仕盡して醫者い醫術を學すし盤將遊戯よ身をこらし病者の輕重い見分ねど天地の季候を熟得して堂島よ高下を爭ふありは其余工職の行ひい丁半回りよ手を動せ不善なすもの拙なからず係る無法の國風なれど身をもつ者い佞辨勝れ寡夫い力量つよく夫婦いさかい友輩爭ひ霊夜むしやくゝや絶ずして不斷櫛乞引うけて再度舌戰なすと云ふ是を防くよ徇なき時い僅一夜よ轉宅かし居かと思へば妻

と隠し是首よ顯れ彼首よしのび其身代の自在なること福者の及ぶ所よあらず仰る不實の貧性と今福城よ引受て口々わめき立れてい世間の外聞かたゝ〻かり来だ寄せ來さる其前よ疾この方より押寄て無心の忠を斷つべきかり身不肖なれとも某い今より福者の軍配かし假令貧軍如何程よ奇計をかまへて向ふとも和漢の軍法しきならべ孫子の軍略 ○「おつと糸りよ云すぎて福者よ損しい忌ことば」臥龍南子の智略を回し彼貧軍を怖風させ世よ貧道を絶さんこと我掌裡よ在事かり必す怯し玉ふ可からすと辯よまかして理を盡し窮閉口よ言上せい大將はじめ一家中其外列坐の大小名皆同音よ感ずる聲しいらく鳴も止まざりけり金持卿い殊さらよ深く感悦なし玉ひ重稱美のお言葉よひきで物まで下されて倚軍効のうへよては所領を賜る嚴命よ金爲はじめ身昌齋身よ面目をほどこして唯君恩を謝し居たる是より口入金爲を福有國の軍師と定め貧軍征罰なさんとて專ら用意をう成したりしが世の風聞よ依るときい貧軍の軍備嚴密よして軍器の備へも亦巨大なりとうわさ取々批評よけれい福軍諸將も油斷かく亦非が用意うかしよける

第三回

貧富兩軍開二戰端一
貧勢數回破二福軍一

去程より貧性屋困助い既より非人よおるへきを貧乏神の冒現よりより不圖待たる貧術の自在の風よあをかれて漂々然と虚空を往こと三百酒手の通ひ舟もなかく及いぬ必地ぞと今い貧苦を打わすれ天票性除々うかれ出し早仆象取り粉子をとり一里來やら千里やらしれぬ間夜も今いはや東雲告る鐘の聲遥かの下より聞へしかい困助心より勇み立明行く儘より下界を見れい國い何處か知らねともさも見慣らしき城廓より襤褸の古幕張廻し糊茶色なる破れ旗より風いはして立ならべ其外箭鏑鬼ノぼろう飾りて痩臂張大將始卒夫迄水蠆爪を兜となし古毛ゆ曇より身をかため早出陣の形相より困助ハ必や手を拍て是う誠より貧方の本陣おるより疑ひなし實より面白し〳〵さらい見物致さんと程よき所より身を駐め道者が劇場見るごとくはあんごりと除念おく眼叩きもせす居たりける○這音より貧州借錢城の大秋貧乏正智雖中納者夏財公い貧乏神の告よより彼福富の金厳を疾み福者を一時より倒さんものと無分別なる貧性を集め歓樂城を責亡し貧乏を心の儘よせんものと諸國へ其由觸れしらせい凡ソ世上い九分九厘貧者の味方より着しかい貧方一同勇氣を増し中よも軍師工面將監成安い諸將より下知して備を立て既より軍配定りて觀樂城を借り倒さんと其出陣をぞおしよける頃い證文換年限月近日借錢城を進發おす其先陣よい幸州小丸の城主借金負身守歳益二陣い若身氣の儘の城主秦加身濺守冬難三陣節前國他行城主原井内隠匠常成四陣い至極必迫の城主何茂苦内の亮鐵皮面五陣い則本陣として惣堪性夏好公を初め旗本勢の面々い小質流四郎春秋青田不作困多耻尾角之燕厚面引居仮彌宗沂家西賈四郎安供小塚井藤雄常從與住裏家棟洩等始め阿玉角右衛門常時小賈醫夫安高白見九郎太夫氏性屋茂女倉四郎青居花太郎などいづれも一騎倒踐の貧臣を從へ后陣よつゞく大將よい貧相股掻の城主郎内皮癬の守海盛強井入道逼亭齋次より大軍卿不齒山子の隱士甘利内匠將監乙六おの〳〵前后を乱さずして磯よよごれし褌の鬱金色なる旗を靡せ襤褸れの吹貫馬しるし皆うれ〳〵の挿物より貳這わせて立あらへ其貧相いはんかたなく暮相々〳〵として押出すい實より見すぼらしく見へよける係る所へ福方よい軍師口入仕間守金爲の軍配として其先鋒より仕贈仕賀守元方二陣元安買能守高賈三陣身臺大治郎末吉四陣海邊大船太夫稽數是も第五を本陣として御大將福富平持金卿軍師爲金を始め家の長臣左右より順へ旗

下勢の面々より悲悲尾正義胸好大多田地郎高持加瀬木爲五郎伸安高利盛之助金延堀田四郎
德成志槐坊柿賀濱邊倉之進並建釜戸數右衛門など皆金銀の六具をかため後陣い氣野長登守
春豊なり其勢都合九億八千貫目余騎觀樂城を出陣して寶穩川をうち渡り鎧塚堤を右よとり
子孫も長き繩手道榮か瀧のこなたなる豊ケ原よて陣取けるかゝれい同じく貧軍も日數重ね
て往程よ堪へ兼たる原と越へ不如意が嶽の麓なる儘の河邊よ軍を休め福方の樣子を伺ひし
よ先手の軍より早馬よて注進なすを聞く所よ彼福方よてい疾よりも有福長者の繁軍よて豊
ケ原よ本陣を據へ口入仕間守を軍師として早陣備へするよしと告るを聞て貧軍いいで一討
よ倒してくれんと金冠頻りよ勇み立を軍師工面將監成安い大層らしく革色の異うでかし諸
軍よ示して申けるい如何よがた〳〵の慓々いども此度の合戰い貧福分めの勝負よて福を倒
し貧を救らす是みな游子の爲の戰ひおれい仮よも眞の人情とて決してつくす所よあらす亦
お人情おを、思ふ可からす唯其前后を辨へす滅多無上よ借倒し又買掛りをするとても直安
のものよ目をかけず嵩びくよして直高の品を口よまかして取込むべし倒れも倒すを忘る可
からすと無茶無茶九茶九茶の事を以て示しけれい世話やき馬場よ本陣を定め盛襄山を中よ

へたて貧福たかいよ英氣をましいまや寄ると待かけたり去る程よ貧方の先陣借金負身守歳
益い心のうちよ思ふやふ我今味方の先鋒として山より高き借金を斯く安閑とおす内よ敵よ
り催促された時よい最早防くよ手段なし疾此方より押寄て斷いふてかりちらし福者よ損失
とらすべしいで目よ襤褸を看て呉れんと馬よまたがり吾手の士卒よ下知をおし大身の槍と
引さけて敵陣ちかく押寄せける是を看て取る福方の先陣仕贈仕賀守元方い心得たりと身上
をかため自ら眞先よ馬を進め大音上よ呼わりけるい悪き借金の振まいかお已れ是迄いくた
びか催促手紙をやるといへど唯の一度も返答せず重る元利よ目よかけず倘其上よ代呂物取
込内入れ一文なすことおくいける甲斐おき貧軍よ心を寄るくされこんじよう平氣の面つき
奇怪おり者ども彼を生捕と怒りと共よ下知おせい歳益これを聞よりも空々穴々と打笑ひ其
借た金べん〳〵といつ迄我手よ在るものか疾くぶち殺して仕まふたおら何條はきだす事あ
らじ已れ如きの痩福よ取引すべき我おらねと序よ倒して呉んものと口鉄砲をぼん〳〵と敢
しかくれば元方いいかで惜しも掛辯すべき家財道具い言よ及いず積物迄も引とれと兩軍だ
がひよしのぎをけつり赤目を釣て戰ふ内福方仕送仕賀守の良等よ高井氣右工門行過と名乘

り口先威しの鐙よ毛色のちがふ兜を着なし同し氣性の舌ながよ面厚皮の鞍をおきひどく憎しき駒よのり片手よあまる大財布金持風を吹かせつゝ肩いからして出るありさま如何なる留主をつかふ者ても斷を返す者いあし行過目を八方よ配り大音上よ申けるい如何よ貧者の奴ばら痩腹こらへてよつくきけ吾こういい仕賀守の内よ在つて貧乏の艤先とり高井氣右衛門行過おり我と拂いん者あらは早く來つて返濟せよと云、さま貧の中に駈いりあたるを幸ひ取懇り雖義させ〳〵かけ回る其取立鋭くして節季を超ゆる者いなく矢庭よ廢屋五六ケ所取集める勢よ貧軍方もへきゑきして先陣色をうしない既よ備をみださんず此狀景を見るより自身守い怒り立毛髪冠を衝き立て眥さけて金眼血ばしり息せきまいて言るよふ言甲斐もなき咏方の貧卒早く高井をからめとれよと聲の下より貧方よて驍武者と呼れ！燒無茶一騎道落おどしの鎧をつけ向行つよき兜を着おし拂ひなし毛の馬よ股かり鎧色たちたる貧卒よかおいす虚八百貫目の重さある貧棒といふ棒ふりまいし起り立たる福勢をあたりしだいよ借倒し人の物をい只取るごとく至極滅法よ突回り今行過を見るとひとしく大聲上よわめきたつるい借金負身の守歳祉が内よ在てうもやけ無茶と呼れたる非道無理之助唯勝ありいで

行過たるうの土根性肩すほまして呉んずと云さま貧棒振廻し討てかゝるを行過い猪子才なひだる腹いまより餓鬼よしてくれんと同しく戰ふ大財布うけつ流しつ質おくことく遣方い名よあふ貧棒のやけ無茶彼方い氣もたの大財布たかいよ火花を散しあい戰ひ數刻よ及といへと更よ勝負も分ざるよこの無理之助唯勝い血氣盛んの燒無茶よて心いら立て怒りをあらいし彼の貧棒を振上て力らよ任しておき倒すを行過是を請うんじ横腹かけて討れしかば何かいもつてたまるべきさすがの氣右工門行過も無理の助よい勝れぬ喩へ腹の虫まで殺されて其儘馬上よたまりへず日頃手なれし大財布も空しく中い明がらと重き貧棒よ倒されて此世を投て極樂てあらで無憋や地獄帳今い夫さへ棒けしと消てあへなくおりよけりこれを看るより貧勢い報謝よあふたる乞食のごとく我おとらじと福方いおめきさけんで突入けれどたのみと見へし行過い今い此世の人おらねい理非も分らぬ貧軍の無理の助よい叫いじと合手よおる者一人もおくみなれぬかほよ逃ゆきて福の先陣うなへを乱し左右へこういい別れけり斯とくるより貧性い勝よ乗じて勇み立すゝめや〳〵と貴入を二陣よ備へし福將い元安賢能守賀高手勢を下知して備を立ておこり立たる貧軍よ冠をふつて渡り合こゝをせんどゝふ

せぎとめ大將元安買能守自ら眞先よ馬を出し小判の黄旆へけらかし大音上よ下知あすやう者どもかならず由斷すな邪根性よ欺されて偽物安物かいかぶるあ米櫃よ迫れる貧勢のよき品物と見るあらハ只見倒しよみたおして直切つた上よ拂をのバし元直きらしてやるべしと四方八方へかけ回り聲を限りよ走るよそ何條士卒の猶豫すべきおのれ利口よ買取んと或ハ直きり或ハぞめき更よ財布の口を明ねハ貧乏方もなかくよ幾人直をつけ來るともすこしも負し引せじと呉てあしらい戰ふうち貧方二陣よひかへたる秦加身澁守冬難ハ先手の軍を助けんと手勢を引てかけ來り負身守よ力よ合し一手よ成て元安をなき倒さんとおせしかハ福方三陣これを見て身臺大治郎孝吉ハおなじく萬卒したがへて飛か如くよ馳せ來り貧福兩軍入みたれしのぎを削つて戰ふさま借金積んて山のごとく質ハ流れて川の如く勝負更よわかざりけり斯る所へ貧方の秦加身澁守冬難ハ身をかたむべき六具もあく漸やく鬱店ぞめきたて張ぼて作りの兜をきなし其外さらよ着るものなく年中はたかのくらしなれハ身体自由よ働かれ嚴氣日頃よ十倍して或ハこぶしでめてまハり又ハ足よて蹴倒し傍若無人のふるまいよ身臺大治郎孝吉ハ此ありさまよ怒り立ち惡き秦加が痩腕よて荒まわるこう奇怪あれ者共手早く生捕て即首拔て得さすべしと烈しき下知を傳へしかハ冬難聞て嘲哢何もしらさるものかと季吉目かけ討かゝるを心得たりと拔合せしばしさゝへて居たれども心ハかたき身台も今冬難か貧力よ如何て敵とふことならず既よ危くみゆる所よ季吉の郎等よ人も知つたる大丈夫河内島之進爲好手織着三郎德成の兩人走附主を助け彼冬難をなかよとり左右ひとしく立むかひ秘術をつくして戰ひけれバ秦加冬離大いよ怒り已れ常着の分ざいで奥島代りハ片腹いたし今よ其首引ぬいて質で殺してくれんずと猛り狂ふて切むすび心いら立向ふといへど彼奴もしらし强者よて當座よ破るゝ氣づかいなく洗ひ晴する性分なれば糊つけくわたりあひ戰ひ數刻よ及びける去れど勝負ハ中々よつかぬ折から貧方の第三陣の大將軍原井内膳常成ハ書出し旗を押立て拂ひ日延しの錯を着したをし氣の兜をかぶり二錢なし毛の駒よまたがり晦日拂と記たる仙過の挿物べろつかし皆性梨子地の鎗を引さげ吾手の貧勢したがへて先の味方よ力を合せ一時よ福を倒さんと乱れあふたる兩軍よ面もふらず分ついり不實の戰おせしかば福方斯とみるよりも彼奴よも先季の殘りあり疾惡取と呼りくく一軍

之れまわたりあい古帳したいまに操かへし疊たゝいて責立れば秦加身濃守冬難い大まに日頃の力を添へ難おく爲好慾成の兩人終まさし殺し尙此上い兩人れ親重代の身臺を倒してくれんと其勢ひ破竹のごとく貧方惣軍一同まに勇氣さかんまかけ向へば福方これまに氣おくれして三陣共まに備を乱し誰一人も止らず四陣をさしておだれかゝるを四陣まに扣へし福將い勇力無双と云れたる洲邊大船大夫積數おり敗走味方まかまいおく吾手の士卒まに下知を傳へ早くも長者の備を立待まもあらず貧勢い勝まに乘して前后より福富倒すは此時なり持金卿をうちとれや進や〳〵とわめきつれ買かゝりまこう押寄たり

第四回

福軍一將摧二貧軍一
兩軍逡巡課二再擧一

斯て此日の貧性い泰加冬難が力戰まさしも富たる福方も三陣具まに敗走なし崩れ立てぞ見へまける係れい貧軍闘まのりて今此一陣艾倒せい早大將の旗本おり黄金つらねし馬印い持金おるぞ疾く破れ由斷をすなと聲々まに呼はり〳〵貧卒勵まし地震の爲まに崩れたる瀬戸物店を見る如く摺鉢德利鉢土瓶てんでまに破物引かゝ忘押寄々々責立る第四の陣を看わたせば福方此手の大將まに洲邊大船大夫積數まに て濱藏魏然と建並べ白旗ならで白壁まにみな家々の印をつけ鳥毛の挿物艦幟川風まにひるがへり大將其日の出立わ連金作の大錦綻頭まに菱形の印し附たる兜を着し無事着荷積と号けたる大太刀をたばさんで三百貫目の量みある碇を小脇かいこんで帆柱太き强馬まに金ぶくつんの鞍をおき味方の纜じたがへて洲まにひとしき貧軍を追風吹をまつごとく早くも長者の陣を備へ艤ならべて待かけたり斯と見るより貧方も霍慾ならで强慾の備へを面まに顯して四陣を目掛てつきかゝる大船太夫是をみて自ら眞先まに馬を飛し勝ほこうたる貧軍まに眞一文字まに割ていり大音上まに呼いるい遠き者は礒打浪の音よも聞け近くい寄て船をみよ我こうい福富方の大回し番船一と呼れたる海部大船太夫積員おり斯云ふ吾が碇の目まに其貧面をうち破りおらくまに沈めてくれんづと彼の大碇をかる〳〵と振回しつゝ貧軍まに表も曲す乘こんで眞一文字まにかけはしれば討るゝ貧將かづを知らす去れば外勢備を乱し后の方へなだれかゝるを得たりや應と積員い勝十分の帆をまきて味方の水主やかしきまで烈しき追風の下知をつたへ者とも進めやあれをみよ吾が此艦きまに叶わずして敵いちり〳〵おも梶の浪まにおされて流れゆく此機をいづさす追つめて本陣までも乘こんて敵の大

將夏好いじめ首を殘らず取かぢよ進めく〳〵と勵まして何も碇を打振つゝ當るを幸ひ乘回す
よさしもよつよき貧軍も船子よ取引なす能いず大軍一途に立ち乱れ早負色と見へける所貧
方四陣の大將よ自時無三四守成面垢しみ袞しめた直垂よ一まい着ころしの甲を年中よ着な
し人品おし毛の駒よ股借貧相院のさま鎗をたづさへ狼狽まいる味方よかまわす一人此所よ
立止り勢ひするどき敵をふせぎ或いさしとめ又い突ふせ逼首を先途と戰ふ内大船太夫積員
い斯と見るより碇をあげて走來りャア小しやくあり其狀よて人交りこう奇怪おりィデ福つ
んの鉄のあじ喰してくれんと打かゝるを成可心得怯する色おく憎き菱垣の玄界よ躍目を走
つてまいるとも抑何程の事やある汝か越る荒磯よりまた越かたき晦日まて一文なしよ懸倒
し帶刀を越て渡つたゝ貧相院の手練の道先見せて難船させたるうへ共即首を荷うちして帆
柱切て呉んづと突てかゝれバ積員も心得たりと身を替し平常の大力十倍して碇を自由よ使
ふさま女子が突ばねつくごとく或い高く又い低く一とめ二ため三わたす敵の五も六つかし
七轉八死九らて十まれと打振敵い丁度百戰百勝の秘術つくして働くい已れ碇と俱供よ底よ
沈めて呉んづと力まかせよ打かゝる無三四の守成面も鎗先鋭く突回る千變萬化とはたらけ

ど何條碇よ敵すべき既よ危くおるところ自時成面の郎等よ古拯閤藤太質穫内記原紐次郎微
々利權十郎古井鼻緒等五人の野郎無茶走つけて猛り回りし積員を中よとりまき討かゝるを
積員眼よ碇を顯しシャ面倒おる逼虫女といゝさま碇をふり上て五人を相手よことゝもせず
火花を散して戰ふうち憐むべし古拯閤藤太彼の大碇をうけうんじ其儘大地よ倒れたれい拯
よまかれて失よける殘る四人い是よかまいず唯上つりよ戰へと敵い名よ合ふ江戸回船一二
を爭ふ勢なれい百や貳百よさしつまる今日暮しの貧性が如何ほど勇を振ふとも更よおうる
ゝ氣色おく右よおぎたて左よ蹴たをし數萬の金玉「チット」金高積こんて一か爵かの海上を
うらうう吹て利潤を見るうも大丈夫の身代おれい前よ進みし質種内記質札かさねし鎧の上
帶引かけながらエイヤとはねれバ身体宙よとばされて質のおいたも受もせず重き碇の利を
うけて儘の川おる水底よ落て流れよ出たりけり此ありさまよ氣おくれして最ど精なき原紐
次郎逼んとすれど脚腰たゝずヒイ〳〵言ふて積員の足よ喰付居たり去を面倒おゝとてはね
かへせバウンと一と聲さけぶやみへしが後へよるまゝ腹の中空しく息い止めける既よ三人
討れしより殘る貳人い如何よせん唯微利〳〵と難十郎アラおうろしい古居鼻緒俄よ中風を

病たる如く得物其儘取落し上向さまに兩人ひとしく將碁倒しをされて同じ馬鹿死したりける既に郎等五人の者討れし故に自時無三四も今いかにも金輪際と一目散に遁だすを積員勇氣彌まして退さじものと風を起し尻に帆かけて追かくれば是に氣を得て福軍の郷に敗れし諸將の軍勢一同どつと取りかへし物軍一時に起り立勢ひ猛門に責かゝれいさしも根づよき貧方も大船太夫か勇力に責立られて敵しかたく本陣さして敗走せい大將難中納門夏好公い怒りと共に軍をいげまし喰しのがんと仕たまへと斯貧先の場所に至り味方の厄介かゝりてい兎ても角ても堪へ難く共に備を乱さんとす係る所へ大將の旗本勢の中よりも人品わるき狼無茶一人すく〳〵とあらわれいで大音上に喚りけるいヤア言甲斐も味方のひん卒たとへいかほど貧本ふとき船持とても左ばかりに長者と言しておくべきや今に續てなんせんさせ貧の仲間に擒として裏屋に逼塞させ呉ん斯言ふわれい貧方で狼無茶と呼れたる家賤貧九郎安貝なりイデ一勝負してあけ呉んと吾先祖よりつたへたる年限切の古証文元利の〆高三拾六貫五百目の鐵棒あらて貧棒を振回しつゝ躍出よき敵あらい引當に借到さんと言まゝに勝ほこつたる福軍にあたるを幸ひ見せ回せい如何で合手に成へきか反古にひとしき古

証文味方に受けりい損失多し寄なさわくお疾くのけよと左右へさつと道を開き直切るものさへなかりしかば貧九郎いなをおしづよく無二無三こよすゝめ回り彼証文の〆高に是非はん金丈い借らんと思へと實行ずば一割でも借てやらんと眼を配り打ふり〳〵立むかへい福軍の陣中より欲面一方齊厚皮と名乗り安物買ふて鼻おとしの鎧によくまたかの前立物をうちし甲を着し股の裂たる鎗を引さけ這奴一番見倒しに直きり殺して買取て借人を活して物にせんと安貝見かけて掛合へい貧九郎いいさみ立まち儲けたる相手おれい心の中に笑をふくみハテ借德に仕てくれんずと彼証文をふりあげて兩人まけよまけじと爭ひ數刻におよひしかど未た勝負もけつしがたく彼方い百目の内よりはへい這方い五兩の内い引じと互に慾面引ぱりて尙もでひどく戰ふうち貧九郎い心いらだち直切にまかして謎の貧乏すぼつこ忽あらいしウンといひさま手を打かくれい股の裂たる鎗ともに今いぽつきと折やつて貧九郎い立上り最早戰ひ是迄なり勝手に催促をてとれと彼証文を投やりて味方の陣へぞかけいりける仕すましたりと一方齋鬼の首をも取たる如くおしいたゞいて証文を懐中なしていさみたち肩いからしてぞしりぞきける

〔作者曰〕此のち慾面一方齋い証文當名の借主に捧すじ以て種々よ催促なしたる其上よ高利の手からせんものと種々足労ついやせしが先の借人の住所もしれす其上年限過たれい何のやくよも立すして若干金子を損亡させ無念の齒がみをおしおから終よ証文引さきて手ふきがみよ仕たるしとそされい聊の元金で不正の高利を得んものと慾の限りをしらざるときい係るためしよ合ふ人ありよく〳〵つゝしみたまへかし○一方齋の事情い下の條よ物語なし聊かこゝゐ記しおきぬ

係るところへ兩方の大軍師口入志滿守金爲い不圖味方の四陣の大將海部大船大夫が勇力よて一度わ貧軍破るといへと余り深入する時い奸智よ長し貧軍師工面將監成安が如何なる奇計なさんもしれず且いこの日も沒果て早黄昏となりしかい互よ夜軍無用おり一先いくさをまとめんと諸將よこのよし陣ふれなし引がねうつて相圖をなせば貧方おおじく太鼓をうち今い夜軍益おしとて相引よこうおりよける去る程よこの夜福方の惣大將福富平の持金卿い軍師を始め諸將をまねき軍の次第を聞しめし海部積員が働を抜くんおりとて賞したまひ尙ほ諸將よ仰げるい予此度の貧軍を今日一戰よ滅亡させんとたやすく思ひ居たりしよ係るし

ぶとき貧性よ正道よたゝかい爲ときわ早晩敗勝決する期なし尙此後の合戰よい口入金爲の智略と以て唯困らしよこまらして此上困究させんい如何よと仰よ金爲諸將よ向ひ今吾君の仰ら意ある如く痩貧乏とい中おからおみ〳〵おらぬけふの手合せ始めことときの勢よてわ貧負色と見へしほど味方危くおりしかと積員どのゝ勇戰よて敵の旗本切崩し勝利い福者よあるといへど雜費損失多くして倒の回るもすくおからず左いへ某愚案を以て今一計をほどこしあば家請小屋まて引とらすと掌を返すよりも安し去れいと云て斯なしていい穴勝味方の德よもおらず是を以てみる時い强てたゝかい好まずして唯この儘よ對陣なし敵寄きたらば殺しく斷り日數重ねて居るうちよ味かたい諸雜費いといねど敵い兵粮よ手づかへて雨露たへ回る拂をはづさず大軍一同よ責立なば忽ち滅亡うたがひおしかた〳〵如何よとヤけれい一統其意よ感伏なし各々陣々かたく守り敵の英氣をうかゝひ居る是首よ亦貧方の軍師工面將監成安いこの夜本陣よ諸將を集め觀なであげて云ける樣今日の合戰既よ味方危きところ敵より軍ひきあけしい是必す口入金爲の軍配よて某愚意を回すときい即ち今日のたゝかいよ味方の虛弱の程をさくり翌より此儘對陣なしおきたゝ徒よ數日を重ね貧者の勇氣をうしお

わせ其盛よのつて責寄ん彼か工よ相違なし斯てい雑用倒れとなり此上難澁なさんこと三百目の米喰よりまた〳〵難面き貧乏の日詰り去れいいつ迄この場所よ痩臂張て對陣せんより一と先本城よ引こもり敵の様子を探りし上某ひとつの妙計あれい是を以て彼を謀り福者よ内乱おこさせ其期よ臨んで一戦あさい持金費すい必定あり何れも此議如何よぞやと言葉を工んて申せしかいみな〳〵是を尤と同じ敵よしらさす夜のうちよ察と此場を引とれと示し合してこう〳〵と夜秡仕馴た貧將あればさしも遲ねし陣々を一夜の内よ引拂ひ中よも身内皮辭守腰盛吉井入道逼迫者を敵を納めのしんがりさせ借金城へと引とりける偖其翌日よいたり福かた陣より是をみるよ霄の景色よ引かへて旗馬印もあらいこう陣小屋までもとりくつし唯曠々たる野原とあり跡よ殘るい武具ならて破れ笠や竹のかい莚縄切桶の底煤箒すんだ其跡よ裏の塵芥場を見るごとく用よ立もの一つもあく此有さまよあきれ果一同よどつと笑ひける係れい愛よ用あしと同く陣所を引いらい金持卿い諸軍をしたかへ前后を固さずしづ〳〵と歡樂城へと入りたまふ衙また貧方大軍師工面將監成安いうのいち借錢城よ在てふく者をほどよく借倒し味方の融通よせんものと晝夜智略をめぐらせしよ不圖一計をあんじ

出玄其手段い此將監が甥ある者よ衛髪結之亟助成とて頗る美男と呼れしうへ世事の諸げいよ行わたり未だ前髪の頃よりも日々出職の役をつとめ彼福富よ老臣たる廣井氣の守胸吉の舘を始め領内を年中入込みまいるこう幸かれよ苦内の謀をさつけ首尾よく事をおこのふあれい味かた赤目を釣すして多くの金を倒さんこと何より以ていと易しとひうかよこの事大將の御前よいて丶言上あし且結之亟助成をこの城中よまねかんこと敵よ知れてい悪かるへしとうの身い暫らくいとまを乞ひ借錢城を出立しておもわく當らぬ其時い不斷用意の隱れ里山子の里へと歸りける畢竟この后將監が如何ある計略めくらすか所い亦次の編をみて作者の趣向を見給へかしエヘン

第五回

欲レ酬二舊怨一贊二貧軍一
敢二唆和姦一逞二謀計一

却説貧軍の一將工面將監成安い元大法寺の舊跡へ居城を占めたる事あれい土俗此所を山子の里と号けたり偖工面成安の其祖先を尋るよ貧相内十八九代非烈天皇の行道正年中生倉の不喰例食蜘蛛張間守家門の子孫よして父い數井術内閑成とで此仁壯年より天晴醫術不たん

れんよて遯〻病人來る時い一人として快氣者なく病者を殺す數をしらず是を哮命と云くろめ得も平氣よ怯する色なく斯る無双の藪井なれい誰とても招く者おく其術名四方よ高く其貧聲い八方よ聞へ夕ァよ財布の底を敲き朝よ懸乞の氣色を診し常よ按腹として夜笛をふき唯紅茶羅よ人をのせ粕利を以て世を渡る素性賤しき貧暇よて母い辻周益「チット」易露店の女にて其名を占と呼ひ父の周易世を去し后隣家なれは洗濯八郎が嬬婦於垢よ育養せられ藪井の家よ雇れて二八の頃より憎といふすねことばさへ云なれて此實内「チット」術内と契りうめ三三九度の盃い同らぬ内よ懐胎と安く產仕の十二分しかも男の子を產て名も蕩丸と号けつ、貧おる中よ成長し丁度三五の十五年父術内い不圖も福國の大優大家金積卿の若君傍不例よ付近國の好みをとつて此術内を召れけれい藪井術内喜悦おし一世の治療を施して本復させて高金得んと吾一族たる拂井玉江の進斷と示し合せ玉江の神よ祈願をたのみ大家館よいたり見脈おしたる其上よ日ならす病氣全快とたしかよ請合言上せしよ豈いからんや養生ついよ叶ず去て弱漸怪となりしうへ鬼籍の數よ入られたれバ日頃憎しと思ふたる退夜坊道心齋の傑侍とおり浮布施をたまひ其上よ藩中院の料までもてあつく是よ下されて藪井實

内閑成い じめ拂井玉江の進斷も其効こゝよ空しくおり乃ち大家出入とめ初稱謝禮の當外れ身よ襤褸々々の不淨をふれて心よ諸の不淨を起し藪井もろとも遺意をくわだて回らぬ是より心曲り是より退夜道心と暫軌轍よおりければ動ともすれい爭論いじめ福島下屋鍋々とて數度の吞戰おす内よ彼退夜坊道心か講中霜付守世話燒よ加勢を乞ひ浮氣信十郎寺好。與與取右工門夫武。尾土利勘化齋。方居坊行益其外裏屋の尼講したがへ其勢都合百萬遍へりだし〳〵同音よ念佛高く責立れいさしもの術内。斷。もこの一戰よ軍破れ玉江の進い討死おし藪井い其場を切ぬけて一と先居城よ引取て信者を談み道心を憎み無念心中やるかたなく此時一子蕩丸を膝下近く招きよせ口おし涙よ言けるい吾過し頃大家の病者を活して手柄あらいし多分の謝禮を貪らんと思ひしかども遅つたなく病者の息子本復せす退夜坊の御布施よこられ其遲紛忘れがたく已れ彼奴を責亡し鉢坊主ともおしくれんと吾戰せしよ言がいなく敵の多勢よ軍破れ遯み切たる斷もちやんぽん太藪もうつことおらす楯筯おらぬ大敵の中よ敵死なせしかい吾も諸ともさじなけて漸やく一方うち破り是迄落のび來りしい吾胸中を告おくため汝も藪井の一子なれば必ずともよこれを忘れず槍掠手段よ鍛練おし時機をまつて咏

方をあつめ福者の金を貪りとり其國よのりて怨敵たる退夜坊主を討滅し吾が運紛を晴せくれよと最とこま〳〵と遺言し手ばやく刀おつとりて今ぞ此世の身代限腹一文なしよかき切てあへなく息い絶へよける夫より藤丸氣もろとも年月住し裏屋城夜の間よぬけてあく〳〵も山子の里よ驚の知遊もとめて是所ようつり父の遺言こゝろよ止め明惑工夫ををすうちよ元來性しき質あれい开も幼年の時よりも佞奸邪智よたくましく虛言を搆へて人を欺き金銀財宝倒すこと痴う直よかへすごとく如何ほどかたき大家父でも此藤丸の口車よ乗らざる者いなきほどの辨舌摩れし應對よ小股をとるの術をおぼへ理を非よ回げても勝を制し其外臨機應變の即答などよ至りてい蘇信張侵も曾ならぬ今い四十路の阪と越へ採事談合一として向ふところよこと〳〵く合点させぬと言ふことなし或い繁花の場所を撰み十間店の表をいり又い馬上よ帯刀おし揚々として在りと見れい木綿小紋の羽織を着し一重卿腰よ扇を挿さず思案橋よて見ることあり斯して歳月逝るうち母い病よ世を去りて我身一つとなりけれいよ〳〵福者の内宮うか、ひ時の來るを待ける所よ此頃貧國福國の大乱起ち發せしかい是れ倖倖の時なりと已れ貧者の味方して彼福富家をかり倒し亡父の妄執晴さんと借錢地よ推

参なし夏好公よ對面許され是まて回らす奸智のほど逐一よ言上なしけれい大將いしめ列坐の群臣皆其奇才を感服し直よ軍師よ命せられ其名を工面將監成安と改め最と鎮重よ用ひらる是い成安來廨よて是より稠の物語りなれい觀客よろしく諒察玉へ○是首に又街髮結之亟助成と云い成安か父數井術内の兄床髮結之進蕩成の次男よして將監成安とい伯父甥の間おり然るよ結之烝助成い若冠より業休修行させんと父蕩成かはからいよて福富の老臣廣井氣能守胸吉が領地よつかいし日々出職よ通ひけるよ今日不慮も山子の里より伯父成安か密書よて火急よ招く由なるゆへ直よ山子の里よ行伯父成安よ面會おし絶てひさしき挨拶おはり助成兩手を膝よつき今日某を召されしい何等の用よていやと不審けよ問けれい成安莞爾とうち笑ひ聲を密て申けるい足下を遠よ呼寄しい密々談じる事ありて升い外の事おらず此度貧福兩國のたゝかい有りしい言ずとも定て詳知の事ならん然るよ頃者盛衰山の麓よて兩軍出合なせしかど素より黄金よ不自由おき敵い名よ合ふ福富なれいなか〳〵倒す事ならず味方微力の貧性かいかほど勇をふるうとも正路よ軍をする時い敵よ遇れぬさきよりも雜用雜費よ追倒され勢ひ盡るい必定なりさるよ依て我々い今一つの工夫を回らし汝を以て事を謀

り手を下さすして安然と味方ゑ多分の金銀を取こみ謀計首尾よく行ふ時い福者の歴々降参させこと充分の仕事ゑせんと汝か奇量一つゑあれい味方の爲ゑ忠勤し予い計略の圖を迦さす首尾よく機關仕負せない獨り貧者の爲のみあらす汝も意氣な艶名たて新駒梅幸ゑ増りたる美名を世間ゑひゞかすへし此義いまより承ひくべきやいかゑ〳〵釋示せハ助成笑を忍んて答るよふ伯父貴浮談々々言たまいず先其手段を聞せたまへ某し如さの技作ゑて群る貧者の大役を命したまふわ此身ゑ執り面目この上候いねと甘く目途をい外さすして出來ることなら命かけ味方の大事を勤むべし爰ゑ一つの氣障あり开い如何となれば仲間の軋轢や友達の口論喧譁と事ちかい仮染ならぬ福方い吾等歳月得意となし歳々高威の旦那故仕業する間い用捨なく頭をはり上け又いなでつけ心のまゝゑ嬲れども左もなき時い小僧ゑ迄犬同様ゑ呼つけられ頓首々々ゑ天窓あからす斯る賤き某しを如何なる智略かしらねども彼の麥飯で鯉つることき味甘話しい覺束なし色情談か丁半の出入引てもある事ゑら假令命ゑかわるとも即坐ゑウンと承ひつて日頃の手なみゑ往生させ味方の勝い得あれとちとかたすぎた役目の上先の場所か大禁物万一仕損ないする時い味かたれ謀計故ゑさとられ亦某も彼首をしく

じり忽ち腮を釣ばしの下の住寓となりもせん斯る危き相談ゑこの好男わちかよらす唯々余人ゑさせたまへ不好々々と云をおしとめ其色情話か手企なれい汝より外ゑ人いなしヤア斯ばかりてい合點行まし其計略の手術といふい結之丞ちかふ〳〵（結）ハハヽヽヤア此ときやぶいゑ上るりのくわいあり何んもんくかわからぬと三味せんのおとテンとあるいのとなり

上るり「ハットこたへてひざぢかくさしうつむいてきゝゐたる

此時將軍ひさ立あをし其課計とわ余の件ゑあらす彼福富方の一老臣廣井氣能守胸吉を始め領分等を汝い日々入こむゑ付思ひ寄たる吾か計策兼て某聞およぶ廣井の息女貞姫といへるわ當年二八の春すきて容顔すくれしのみならす風流舞や糸竹ゑ妙なる事の聞へたかく福者のれき〳〵嫁とらんと多く結ひ人爲ものあれと廣井兩親寵愛して今ゑ縁組いたさせす何ゑまれ姫の言ふ如く是を免して明暮ゑ氣隨ぞだてをなす由なれわ是うまことの幸ひあり汝を以てこれを計るわ先第一ゑ男振仇て氣のきく風躰より一見へ二男三金いなけれと四藝い心得て天晴極道できたるうへ殊ゑ婦人を迷すゑ千話や口舌の妙を得て浮氣あすこと多しと聞く左あれい汝翌よりわ廣井の館へ謀ひて多年功者の程をもつて徒姫を思ひつかゑ首尾よく

おんこと抱つけなは吾計略の十二分斯る役目い汝より外よつとむる大將なし心へたるかと云けれバ助成忽ち受ひいて涉氣つかい下さるあやかて姫をバうあつかせ欠落いたしてまいるへし伯父公必すうの時わ法外りんきをしてからよ出て行けなんぞと言ことうれがあけれバ大丈夫必らす請合申ますといへバ將監言ふよや及いぬ其時こう奥の物置明渡し人情本ぐらしよしておかん　結「コハたのしみある其お言葉うれを力よ日をまたづ姫の手ひいてつれきたらん必ず物置をあけおいて涉用意あれや伯父公どの　將「チヽいさましヽ〳〵必すともよふられ置ようずいぶん分別持こむべし　結「うこらよ於てい承知の助成　將「まつ夫まていい万事密よ　結「いつれも忍が穩の肝要　將「天晴でかした結之奥助成　結「工面將監成安との

將「さらい　結「さらい明

ト此ときゑ上るりきこへて大廻のもん伺

上るり「さらい〳〵といふまゝよわかれてこりい〳〵　おくり三重

拍子木の音　チヨン。チヨン。チヨ〳〵　チヨン〳〵〳〵〳〵

第六回

婢女溺レ情陷ニ奸策一
深窓處女完ニ春情一

見越の松い身代と共よ榮へて最と高く十有餘間の表間口横町よ回りし格子戸の内よい鐵の網いりつめ門の柱い左右よふとく二間の揚店さあからよ千鳥がたある塀のごとく青石たゝむ水溜の泉洋々と金魚の躍りつ鯉つ浮きしつみ溜と御影の石しきつらね軒をかこみし隅藏の乾よ立てし形容い天よ聳て巍然たり紺布の暖簾飄々と客を招くの意を表し終日ぼん〳〵聞ゆるい鉄砲あらで灰吹の叩く音うと知れたりじやん〳〵ひゞく鐘の音は陣鉦あらて天坪の黄金を量る音ぞかし夜を起番の拍子木よ時をしらせて非常を守り捨子を防ぐ提灯い軒を照して光々たり抑も亦這首い何人の城郭なるやと繹ぬるよ彼福方の長臣廣井氣廼守が居城よして其名を兩替城と云ふ家内の繁昌いはんかたなく拾貫目箱内よ運へい革財仙の出這りしけく百貫貳百貫の錢車大筒臺よ等しくして京よ來れい西へ歸り寶を積んで扱ふこと宛ら瓦石をならぶるごとく名よ合ふ廣井氣廼守の名實背かぬ事ありとぞ偖亦彼の助成い此處へ日々入込て四方山話しの序よは俳優似面の錦繪あどたへず所持して子者よまで是をあたへ

てなづけおき夜い進中うちつどへ新内物真似軒ずけよ婀娜お姿を見せなどしてさま〳〵こゝろを尽せしよ左おくとも婢女ば仇怨おすへき者なるよ意氣てきのきく助成い其出立よ迷いされ忍びてつけ文する者なと頻りよ色目てしらすといへと加減のわるき居膳へ始よりして喰きなけれい唯よきほとよ辞退してかの本膳よ居らんと一向こゝろを寄けるよ此間から姫か側女よ可霄といへる者ありて容すくるゝ耳ならす年い二十の上こして心ざまさへ賤しからす當家よ久しくつとめる上よよろず性しき者なれい胸吉夫婦い姫かことしつけ万端かれよまかせ最とへだてなく召つかふしかるよ可霄い過しころ彼助成が男まへやさしき氣たてよ思ひ染め忍び〳〵よこゝろを通わ玄いつしか割なき中となり末の契ぞ結ぶといへど互よふかく包みけるゆへ内外の者よいたるまてさらよしるもの無かりけり斯て助成い可霄よ云々言いふくめ若しも此事成就せい末い互の本望と口よ任せて逃ければ可霄も惚れた男の事ゆへ疾く姫よまで此よしを申含てありければ相談忽ちとゝのいて偖亦可霄の言るよふ御部屋よ琴の音ある頃相圖をたがへず來たもふべしといへ妾い年増ゆへ姫君いまだつぼみの花勝る色香よ感いされいつしか深入あるまゝよかわせし褥ひも泡と消へ寄邊おきさの小

船よも成行もせゞ如何よせんと夫のみいとゞものうければくれ〳〵つゝしみたまへかしと千話でと交りにさゝやきて何角と互よしめしあいせ人眼もあれい助成い聽て可霄と別をなし此日い我家よ皈りつゝ意の中よ勇みたち最早日頃の謀計も十よ八九い仕負せたれい且の夜姫をうまくやりつけ其上よて可霄を偽寄し十分姫をなびかして兼て伯父貴の望のごとく山子の里よ誘出して姫と可霄を兩手の花おもいもよらぬ佗住居風雅おくらしをせんものと獨り笑つぼよ入相の鐘聞よろよ密書を認め平常入くる下回り毛反樽太を使として彼の將監成安の許へ件の一儀を注進せんと明るとりしと待居たる這首よ又徒姫い今日七夕の節會よとて父胸吉い妻もろとも春豐が館へと出ゆく跡よ婢を靈間の座舗よ呼あつめとり〳〵さゞめく噺しぶり戯場のういさをしたあとい男の美醜いゝあらべかゝるときよいいつとても皆助成が婀娜姿を言をうろへて褒うやし音羽屋よ似ているのイヤ高島屋よ瓜二ッ成駒屋よいぶ聲だけが似ているあゞゝ口々よ好きと思へば何よつけ戀しき方い氣をひかされさま〳〵噂を聞くふつけ今い年頃なりければ下たもへ出る若草よ蝶の羽袖よ寄るごとく春情うごきて何とおく唯助成がしたいしく店で月代するときい玄關口からさし覗き又臺所よ來るときは

納戸口から細見してゆかしおもひよ附慕ふさすがよも未だ初戀の人よいうれと云ひかねて物おもわしき風情を見てとる可雪い心得て傍よ人なき折と見合せ密と姫よ語れるい彼の助成と示せし如く日頃よりして助成が姫よ心を感わゑつせめて男と生しからいたとへ一度の添寐ありとおもひの胸を晴したしと忍びかねての私へのたのみ姫君あよとか思しめす業躰こう賤しけれ他人よ勝りし男まへ戀よい尊卑のへだてあし私ももうつと美しければあんあ艶男とうふならゞ行末たのしくゝらさん物をこれよつけても媛君い女の中よも果報なお産れァノほどのよいお方からあれ程までよ思れたまふいテモお羨やましひことよとて已が眞の意よまかせ出放題よ進めしかばよし左なくとも戀焦れいとし可愛とおもひたる其の折からようの人よ戀したわるゝと聞うへは姫いうれしさ恥さ飛立やうよ思へとも可宵の手まへも面目なく最と麗の顔よ紅葉ちらして耻げよァイトへんじも口のうち可宵い早くも是をさつし今宵かならず御居間まで忍び來るとの約束なれば方端い妾よ任せたまへと言つゝ姫よ得心させ内外を忍びて髪を直させ化容粧をつくろひて黄昏をおうしと待けると外よ知るものなかりしとぞ頃しも日暮おくまりたる一間のうちよ琴の音は徒姫が今宵こう日頃慕ひし

戀人よ情け通いす調ゆへ最とちからを込たれい先の程より庭ごしよ忍び聞いる助成い姫の調を聞よつけ彼高倉院の敕をうけ藤原の仲國が嵯峨野の興よたづねゆき調を目的よ遂たまひし小婚れ局もかくやらん又御曹子か通いれし淨瑠璃媛の再來かと疑ふばかりの粧よて是まて多くの女よも思ひ思はれ色情よ后へい引ぬ助成も今此姿を看るよりも流石よ胸のとゞろきて襟の邊も粟生だち身もふるはれて魂も虚空よ飛ぬばかりほれ〳〵として余念なく見とれて玆よ聞居るよ琴の調も綾鶴の唱歌よ今いうつかりと忍ふ其身をうち忘れ腰よさした篠笛を口ようつしてうへ竹の音いろくるはぬ合のてすきてうたのつゞき「うのかねことも。おゝ去みゝと。かあいとかけといとしとへんじ。おんあざよしておとこきのむすぶるよしのうちかけさへもぬいてなかめんちよみくさ。

此笛の音を聞つけてたしかようれとさとりしや可雪い先より庭よおりうつと這方よ歩行つゝしられぬよふよ助成を切戸の内ようつとおくるを誰しる者もあかりけるされい此日の徒姫いあいぬ昔よ百倍のおもひ增りて助成を明くれともよ忘れかたく可雪と共よ言合せ或い

見物さらへ講と言くろめてい外よいで兼て途中よ助成と出會やくりくおしおきて附うふ子者よものなどとらせかたく他言を口どめして彼首の様見這首の船遊果い築地の出會茶や一寸間しでとも重るうちいつしか可零と助成がさきよわけある事までも徒姫い知といへと今さらりんきもするよあらず三人ひとしく心を合せ倚ゆくすへのことなどを慈しのびよかたらいける

第七回

婢女協力助二亡命一
雙親溺レ愛被レ食レ財

累代の家法爲よ狂ふ恩愛羈伴貞婦の操爲よ曲る慈母の情彼の忍び難きを忍び堪へがたきを堪へ終よ醜行汚名を千歳よ傳ふ此れ世上一般よ親子間の情愛より醸し生する所よして亦止みがたきものあらん乎去れい彼の結之亟助成い日頃の計策今いはや充分事を仕負せたれば唯此上い徒姫を味くすかして彼れ俱よ山子の里よ走らんと旦暮意よ工夫をこらし或夜可零よ忍びあひ耳側ちかくさゝやきけるい卿が切なる心情より手よ入りかたき姫君を望のごとくおびかすこと是よ過たる喜びなしとは言ものゝ是まては忍びかくれて合ふのみなれば裏

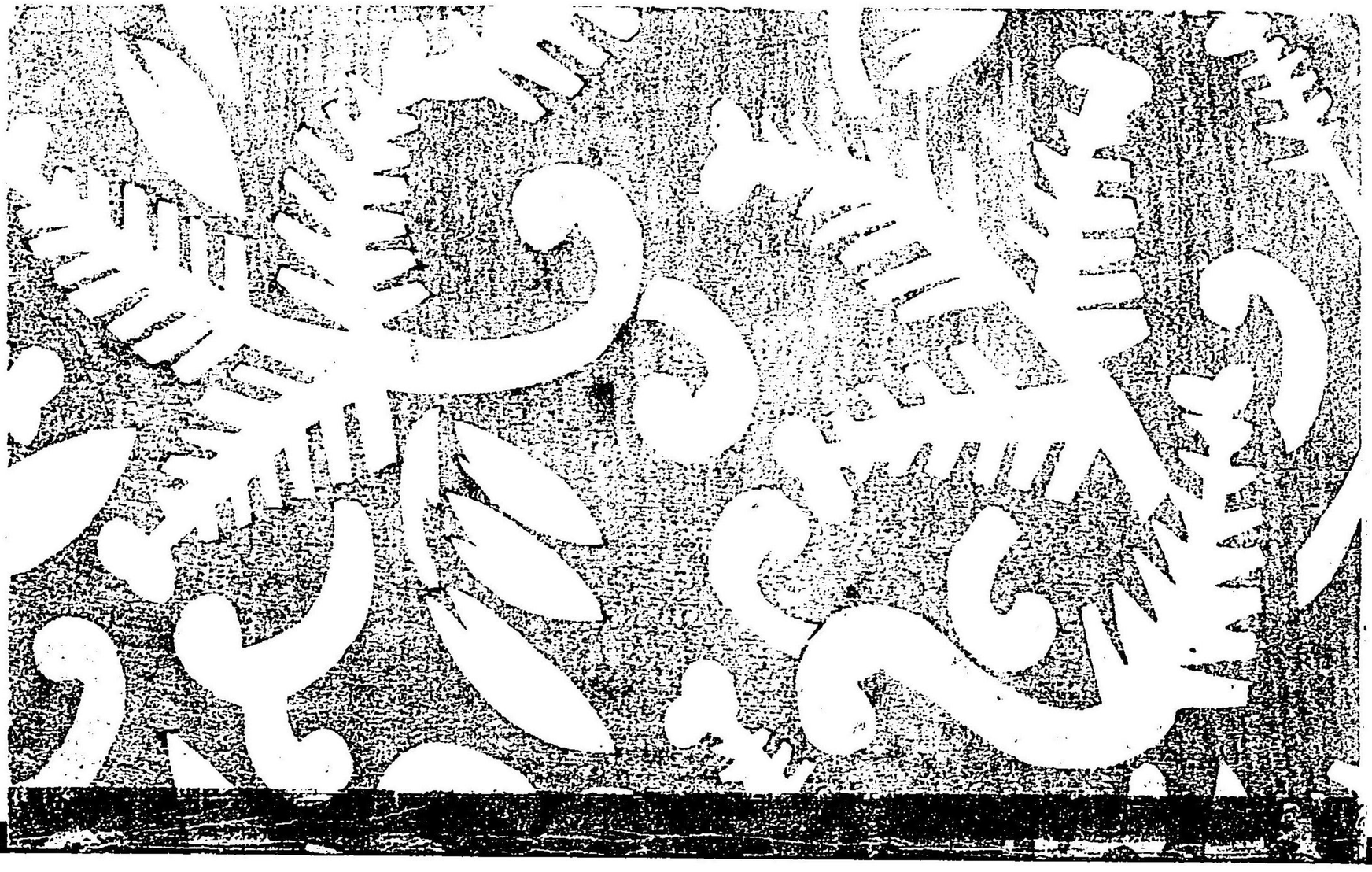
成繼つくすことなく何りいたして娘君を得心させて期を見てほかへ連出しかくしおき爾吉尖婦をおどろかせば定て手あつく尋問べし其時御身い館よあつてうれとあかさで遠くから唯何事も娘よこかせ彼か仕出せし話しぶりよ聽さず直よ我行へを追慕ふてたづねべし其時本望たつせんとて程よき場所よ待うけて姫を首尾よく誘ひ出し山子の里よ走るへしと意のうちよ首低つゝ身仕度なして夕間寂とぶかごとくよ樹の口の茶亭よ前より待かけてあれこれ舟を見わたす折から今此舟の岸よりも徒姫の上る姿をたしかよ看るより人かけよ紛れながらよ附添ゆくと可零い早くもこゝろずき餘のこしもとよしらさぬやう姫か袂を引おからうれと彼方を目くはせすれい振向まゝよ思ひよらす五よ見合すかほと顔姫いうとしさなつかしさ側のものさへうるさくおりしバしなりとも話したく思へど今さら供人を先よ飯しもおらずしてしんきお振りの可愛らしく兎やせん角と思ふうち可零いぬからず口てしらせ姫きみ小用よ行玉いすやといふよ此方も心得て婢共を堤よまたせ可零い手を引先よ立土手を下へとおりゆく所助成あとよ忍びつゝ人目見合せ姫かてをしつかと握りて可零よむかいあといは身と示せし通り急度手筈のたかわぬよふ是こう肝心要おり去れい又夜の更る程館

よい案じ煩ひ在るおらん疾く皈へりて方便な虚言を以て言紛らし跡を謀るか肝要と言ふよ可霄い心得てまたせおきたるこしもとの飾よ走ゆき申よふうす〳〵おんみらも知る通り媛君よい劉郎とお落し申てあげたれど係る變事を御兩親へ御聽せ申さば嘸おさわぎのことあらん夫よついても妾事い平常御兩親よおありかわり彼の媛君よ附添ながら御行衛さへ看うしおいしといへは是みな妾か落度御身たちの罪よあらずとく〳〵皈りて此よしをたしらせ申してよき程よ言のがるゝの外なしと言ふよみな〳〵是非おくもすこしこゝろを休ませて可霄か言葉よ任せつゝ以前の川邊よ立かへり船をいうかせ櫓下し亥の中の頃よ廣井なる館よ戻りて申すよふは船より上りて賑やかな町を迫々行程よ往來の人も追々よ増よ從ひ往來もいよ〳〵込合ひおしめふゆへ元の川邊よ立もどり船ようつりて皈らんと其皈るさよおしやいの人の中よて姫君を看うしないてうちかどろき一同うろたへあちこちをもみおふ中をおしわけてさま〳〵あとを探せども女ふぜいの妾らが身てい迎も〳〵看あたらずこゝろならずも立かへり御ちからをあをかんと心の中も后前よ乱れてよふ〳〵歸りたれば只此上い妾か罪を責る事い后よまわされ只管姫の御行衛を探させ玉へと空言を涙よまぜて言まぎらす

海婦の言葉よ廣井胸吉妻い元より言も更なり家内上下の大動出入の者を呼あつめ直様彼處よ至らしめ人數を分てたづねさせ其后よても胸吉夫婦暴き風よもあてまじく日頃寵愛かぎりなき一女の行衛しれねい宛ら狂人の如くよて可霄としかり慰りつゝ寢食わすれて泣悲しみ前后不覺の歎きこう實よ理と知れたり可霄は今い仕すませり追々實地を白わせんと最も案じて考へし樣子よもてなし言へるよふ平常姫君の御よいかねて此ころ好男子の評判たかき街髪結之亟助成とて山子の里の者よしており〳〵此處て看へる男を明暮かれてれ戀慕せ心有けよ見へしゆへ恐れおふくも折々い御意見もふせしともありしかもしや彼の時途中よて其助成よ出合して妾の眼をば忍せたまひ亡命遊いされし事もやと思へい最とゞ手數なから彼の山子の里へ行き探せいしれぬ事あるまじ齋餅かしらねど一度い御探索下さらい妾か身よも添おしと誠しあかよ申けれい廣井夫婦も漸々よ少しい手掛のつきしゆへ奥方ともよ語り合ひ何よもせよ此上い一足早く尋ねし上若し其言ふ譯合で山子の里よ居るおれい直にも可霄をつかわして姫か心旅開たるうへ又兎も角も詮術あるへし去らい今より山子の里へ遣す人い誰よせん是も可霄か得策らんと種々慈愛なる事柄を最も細よ言ふくめ其用意を

ぞいたさせける是みな成安助成か計略よて爲すこと、わ夢よも福方しらさりける

作者曰

偖是まての條い。ちとの老賢よてくだ〳〵しく看客の欠伸仕たさたんと是首よ驛泊綴を

かへて助成い従姫と道行のだんを極簡單よ略らんよい則ますサヨウ引